

アユタヤ王朝の明暗

近藤 節夫

ユネスコが世界中の文化遺産や自然遺産を人類共通の世界遺産として登録し、保護を始めたのは 1972 年のことである。それまで多くの「世界遺産」は、それぞれの国の事情によって修理保存、修復作業により充分保護されたものもあれば、その一方で数多くの「世界遺産」が荒れるに任されていた。その意味では、ユネスコの世界遺産条約は、かけがえのない人類共有財産の保護に大いなる福音であった。

しかし、遺跡保存作業の過程で、総合的な調和やバランス、環境配慮ということになると、それがいかに難しいかということを実感として感じさせられることがある。

タイの首都バンコックの北へ 120 km ほど上ったところに、14 世紀のアユタヤ王朝遺跡がある。初めてここを訪れたのは、世界遺産条約発効の 6 年前、1966 年のことだった。赤レンガを積み重ねたアユタヤ王朝の遺跡は風雨に晒され、遺跡の中はこどもたちの遊び場となり、王朝時代の城壁の欠片はこどもたちの遊び道具となっていた。

アユタヤを基盤の目のように敷き詰めた広い道路は、中央部をアスファルト舗装にして両端は芝や草が覆い、涼やかではだしで歩くとひんやりとする爽やかな土地の感触があった。そんな環境の中を馬車や人力車で、またはだしのまま歩き回っては民家を訪れ歓迎されもした。気が向けばメナムの川向こうの日本人町跡へも足を伸ばしたり、身体いっぱい吸い込む新鮮な空気は、心から気持ちが温まったものである。部屋の天井にトカゲの張り付く粗末なモーターに泊まっては、街の中心のマーケットへ人力車で食事へ出かけた楽しい思い出が心に残り、その後新婚旅行は躊躇うことなく再びアユタヤへ足を運ばせた。

それ以来何度か訪れたアユタヤだが、ここ 30 年近く訪れていない。その間アユタヤは世界遺産に登録され、管理体制は厳しくなり、フェンスが張られ、警備員が巡回してこどもたちの入り込む余地はなくなった。押し寄せる観光客のために道路は整備され、かつての草付きの道路も駐車場と化した。アユタヤのランドマーク、ワット・プラ・シー・サンペットの 3 つの塔には、夜になると煌々とライトが照らされ、街にはホテルも建設された。

農村地帯の生きる道として、街の活性化は賑わいをもたらしてくれたが、それと引き換えに、タイ農村地帯の素朴で牧歌的な穏やかさが確実に失われようとしている。